

第5章 お喋り

オウイデイウスは、神々にはそれぞれにさまざまな動物が捧げられるが、鳥も犠牲となる運命を免れなかつたことを述べて、次のように歌っている。

鳥たちよ、かつてはおまえたちにお咎めはなかつた。おまえたちは田園の慰め、森に住みなす無垢なやから、巢を営み、卵を翼で温め、軽やかな嘴から甘い調べを歌い出すのだから。けれども、そんなことは何の助けにもならない。おまえたちの舌は罪深く、神々の意中を暴いてしまう、と神々は考えているから。だが、これは考え違いではない。なぜなら、おまえたちは神々に一番近くにいるので、真実の兆しを、あるいは翼で、あるいは声で示すのだから。長い間無事であった鳥の種族も、ことここにいたって、ついに犠牲となつた。神々は自分たちのことを触れまわる鳥のはらわたに喜んだ。そこで、しばしば、つがいのうちの白い雌鳩が夫の鳩から引き離されてイーダリオンの竈かまどで焼かれ、鶯鳥には、カピトリウムを守つたことも、イーナコスの娘なる麗しい女神よ、

あなたの皿に肝臓を捧げずにはすまず助けとはならない。夜には、夜の女神ノクスのために鶏冠とじかのあ
る鳥が屠られる。目覚ましの声で一日の暖かな始まりを呼び出すからだ。

〔祭暦〕一・四四一―四五六

鳥は鳥占いを通じて神のお告げをもたらすことにより人間に尊ばれる(第I部第8章「予兆」参照)はずであるのに、ここでは、そのような神事を担う鳥が、神々の目には神聖であるどころか、逆に罪深い「お喋り」と映るとされ、それが鳥も犠牲にされることを免れなかつた理由として語られている。しかし、鳥の命を奪つて犠牲とするのは、もちろん、人間であつて、神々ではない。そこで、お告げによつて被害をこうむっている神々ではなく、利益を得ている人間が鳥に罰を下すという逆説的な構図が、ここには描かれている。これはオウイデウスが得意とする機知の産物である。とりわけ、引用の最後に言及される夜の女神への犠牲を見ても、これに関する他の典拠はなく、また、鶏の声が夜の終わりを告げるといつても、それは一日の仕事の始まりを合図し、怒る者があるとすれば怠惰な人間に決まつているのであるから、詩人によるユーモアの表現と考えるのが妥当である。それはともかく、オウイデウスは自分自身が饒舌であつたためか、その作品には「お喋り」のモチーフが頻繁に現れ、そこにはよく鳥が関わっている。そうした物語を本章では取り上げる。

1 アスカラポス

豊穡の女神ケレースの娘プローセルピナが冥界の王デイースにさらわれた物語については、すでに触れた。プローセルピナは、結局、一年を二つに分けて、天界と冥界それぞれに六カ月ずつ暮らすことに

なつたが、彼女が冥界で食物をいっさい口にしていなかったなら、天界への完全な帰還もかなくなっていた。しかし、彼女はその禁忌を破っていたうえに、オウイデウスによれば、そのことを見ていて告げ口する者があつたため、ごまかそうとしても手の打ちようがなかったのだという。

彼女は、世話の行き届いた果樹園であちらこちら無邪気に歩くうち、ザク口の実をたわんだ枝から摘み取ると、薄黄色の皮をむいてから、七粒を手に取り、口に入れた。それを世の中にただ一人、アスカラポスが目撃した。これはあるとき、言い伝えでは、オルプネーというアウエルヌス(4)のニンフらのあいだでも隠れもない評判のニンフが、冥界の河神アケローンと交わつて漆黒の森の中で産んだとされる者。これが目撃して、無情にも告げ口をしてプローセルピナから帰還を奪い去つた。冥界の女王は嘆息を吐き、目撃者を不吉な鳥に変えた。火の河プレゲトーンの水を振りかけることで頭を嘴と羽毛と大きな目玉だけのものにした。彼はもとの姿を失つて、黄色の羽根に包まれ、頭が大きくなり、爪は長く湾曲し、無精な腕から生えた翼を動かすことはほとんどない。来るべき悲嘆を知らせる不浄の鳥、死すべき人間にとって凶兆となる怠惰なミミズクとなつた。

〔変身物語〕五・五三五―五五〇〕

なお、告げ口をした少年の名前アスカラポスはギリシア語でミミズクのこと、その母親の名オルプネーは「夜の闇」を意味する。

さて、凶兆としてのミミズクからすぐに思い起こされるのは、『アエネーイス』の中の次の場面である。

このとき、悲運のデイドーは運命に恐れおののき、死を願う。天の蒼穹を見つめることも厭わしい。この企てをさらに進めよ、命の光を捨て去れとばかり、祭壇に香を焚いて供物を捧げたとき、目に入ったのは、言うも恐ろしいかな、神聖な清水が黒ずみ、自分の注いだ御神酒おみきが暗色の血と交わるさま。これを見たことを彼女は誰一人、妹にすら口外しなかった。そればかりではない。館のうちには大理石づくりの社がいまはなき夫のためにあり、これを拝むに彼女は見事な捧げ物をし、雪のように白い羊皮と晴れがましい枝葉が巻きつけてあった。この社から声が呼び、言葉が聞こえてくると思うと、それは夫で、夜が大地を暗く包む頃にいつも現れた。また、ミミズクが屋根の上に加た一羽、弔いの歌を何度も恨めしく歌い、涙にむせぶ声を長く引きずった。

〔「アエネーイス」四・四五〇—四六三〕

アエネーアースを引き止めようとする画策が不首尾に終わったデイドーは己れの死を願い、その心中は黒い闇に覆いつくされ、真つ暗がりの中に恐れと不安をかき立てて不気味な声がさまざまに聞こえてくる。耳を塞いでもなお響いてくるようなそうした声を、ミミズクの弔い歌は表している。

2 ミニニューエーイデス（ミニニューアースの娘たち）

ミミズクも夜行性の鳥だが、これにフクロウとコウモリを加えて、夜の鳥にまつわる物語がニーカンドロスとコリンナによつて語られていたことを、アントーニーヌス・リーペラーリスが伝えている。

オルコメノスの子ミニニューアースには、レウキッペーとアルシッペーとアルカトエーという娘が生まれたが、度を越して仕事熱心であった。他の女たちが町をあとにして山中でバッコスバックスの神事を行

うのをしばしば非難するまでになったので、ディオニューソスが娘に化けて、彼女らに神の祭儀と秘儀を放棄せぬよう忠告した。しかし、彼女らは耳を貸さなかった。そこで、これに怒ったディオニューソスは娘の姿から牡牛や獅子や豹になり、機織りの横木からはネクタルと牛乳が流れた。この異兆を見て、娘らは恐怖にとらわれた。すぐに三人は籤を壺に入れてから振り出した。レウキッペーの籤が出たので、彼女は神に犠牲を捧げる誓言をし、息子のヒッパソスを姉妹と一緒に八つ裂きにした。彼女らは父の家を去って山中でバッコスの神事を行い、蒿とイチイと月桂樹をへ食べんていたが、ついには、ヘルメースが彼女らを杖で触れて鳥に変えた。それぞれ、コウモリ、フクロウ、ミミズクとなった。三人とも太陽の光を避けた。

〔変身物語集〕一〇

三人の娘はミニユエーイデスと総称されるが、この話形では彼女らの特質として仕事熱心さだけが語られる。だが、オウイデイウスによれば、彼女ら三人は仕事のかたわら物語を語り〔変身物語〕四・三一―四一五）、それもそれぞれがたくさんの話を知っていて、選り抜きの珍しい驚くべき物語をするので、「仕事熱心」よりもむしろ「お喋り」という印象を与える。

三人のうち最初に話をした娘の名前をどういうわけかオウイデイウスは明らかにしていない（また、残りの二人の名前もアントーニヌス・リーベラーリスとは異なっている）が、この娘はピユラモスとティスベーの物語を語った。それはいまではシェイクスピアの『真夏の夜の夢』によって、あるいは『ロミオとジュリエット』の筋に使われてよく知られているが、そのときは人々に知れ渡っていなかったからであった。かつてバビュロンに類いまれな美男ピユラモスと美女ティスベーがあり、壁一つ隔てた隣同士に暮らしながら、親の反対があるために、焦がれる恋の思いを、壁にできた細い裂け目を通して

話をするだけで満たそうとしていたが、ついに町はずれの桑の木を待ち合わせの場所と決めて家を出ることにする。しかし、先に着いたティスベは、そこへ口を血まみれにした獅子が現れたため、洞穴へ隠れるが、ヴェールを落としてしまう。遅れて着いたピューラモスは、獅子が引き裂いて血をつけたヴェールとその足跡を見つけると、恋人が襲われて死んだものと早合点し、自分が遅かったことを呪い、剣で自害する。そこへティスベが再び現れ、ピューラモスの亡骸を見つめる。彼女は、両親が二人一緒に墓へ葬ってくれるように、桑の木が二人の死を悼んで黒い実をつけるように、と願ってから、恋人のあとを追う。その願いはかなえられたという。

このような物語のあと、二番手にレウコノエーが口を開き、アプロディーテーとアレースの密通の後日譚を話した。密通は、万物を見ることのできる太陽神によつてアプロディーテーの夫であるヘーパイストス神に知らされ、ヘーパイストスが現場を取り押さえたことから、アプロディーテーは告げ口をした太陽神を懲らしめようとして、太陽神がレウコトエーという娘への恋心に身を焼かれるように仕組んだ。太陽神はレウコトエーの母親に化けて彼女に近づき、二人だけになると心中を打ち明け、思いを遂げた。しかし、これを見て、かつて太陽神の並々なぬ愛にあずかっていたクリュティエーという女が嫉妬した。

彼女は密通を人々に知れ渡らせ、中傷を交えて父親に告げ口する。父親のすさまじい怒りは手の着けようもなく、娘が祈りを込めて両手を太陽の瞳へと差し伸べつつ「あの方が力づくで、やむをえず」と言うのに、深く地中に掘った穴へ埋めるむごい仕打ち、その上へ砂を盛り上げて重しとした。

太陽神はレウコトエーを助けようとしたが、運命はそれを救さなかつたため、ネクタルを注ぎかけて彼女を乳香じゆうかうの木に変身させた。他方、クリユティエーはもはや太陽神に見向きもされなくなつて憔悴しながら、ただ太陽だけを見つめ続けた。

言い伝えでは、体が地面にはりついたそうです。色が青白いところは血の気のない草の葉に変わり、赤みのある、顔であつたあたりはスマレに似た花が覆います。彼女は根をつかまれていても愛しい太陽のほうを向き、姿を変えても愛を保ち続けているのです。(同四・二六六―二七〇)

ここで「スマレに似た花」とはヘリオトロープのことで、これは「太陽のほうを向いた」という意味のギリシア語に由来する名前である。そして、この花は「熱愛」という花言葉をもつ。

続いて最後にアルキトエーがサルマキスの物語を語つた。サルマキスというのは小アジアのカーリア地方にある泉のニンフの名で、このニンフは他のニンフのように狩りに励んで野山を駆けるということがなく、いつも自分の姿を水面に映しながら、どうすれば一番美しく見せられるか、そればかり考えていた。そこへ、ヘルメースとアプロディーテーとのあいだに生まれた美少年ヘルムプロディトスがやつてきた。ニンフは逸る気持はやるちを抑え、近づく前に話しかけた。

坊ちゃん、どこから見ても神様としか見えませんわ。神様なら、きつとクピドー様でしょうし、人間なら、ご両親は幸せ、ご兄弟も幸運ですし、もちろん、幸運の恵みはご姉妹にも、授乳なされた乳母殿ちちのぼにもありますわ。でも、その誰よりもずっとお幸せな方、それはあなたのフィアンセ、あなたが妻にと決めた女性です。そんな方がすでにおありなら、私とは隠れて楽しみましょ

う。まだないのなら、私をその女性にしてください。同じ褥しとねに潜り込みましょう。

(同四・三三〇—三三八)

しかし、うぶな少年はこの言葉に顔を赤らめ、ニンフが迫るのを拒絶した。サルマキスはいったん退いて茂みに身を潜めたが、少年が泉で水浴しようと衣服を脱ぎ捨てたのを見ると愛欲に燃え、水の中で少年をつかまえにかかった。

ついには、必死に抵抗し、逃げ延びようとする相手を絡め取ります。さながら、雌の蛇が王の鳥に捕らわれ、空中へさらわれながら、宙吊りの体で頭と脚を縛り上げ、尾で広げた両翼を絡め取るようです。

(同四・三六一—三六四)

こうして絡み合った二人の体は別々にできない一つのもの、つまり、両性具有になったという。このとき、ヘルマプロデイトスは父なる神と母なる女神に向かって、この泉にやってきた男は誰であれ、立ち去るときには男未満になるように、水に触れるやただちに柔やわな体になるように、と祈願し、その祈りは聞き届けられたという。

こうして三人の娘がそれぞれの話を終えたとき、ないがしろにされたバツコス神が異兆を示し始めた。

すでに明るい時間は過ぎて、近づいていた頃合いは暗闇ばかりとも光ばかりとも言えぬ時刻、光とほんやりした夜との境目であった。突如、目に映るは家の震動、油を注いだように燃え上がる灯火、炎が真っ赤に輝く建物、獐猛に吠える野獣たちの幻影。さつきから姉妹たちは煙渦巻く家中に

隠れ場所をさがし、それぞれ別々の場所で炎と光を避けている。暗闇を求めるうちに小さくなった手足を覆って皮膚が広がり、両腕は希薄な羽根に包まれる。どのようにして彼女らが以前の姿を失ったのかを知ることは、暗闇が阻んでいる。彼女らは羽根で浮いたのではないが、体を支える透明な翼があり、話そうとすると、ごく小さい、体に見合った声を発する。聞き取れるのはかすかに歯並みから洩れる嘆きだけ。森ではなく、家々に群れ集い、光を嫌って夜に飛び、名前も夕暮れにちなんでいる。

(同四・三九九―四一五)

「夕方」を表すラテン語はウエスペル (*vesper*) ないしウエスペラ (*vespera*) で、これにちなむ名前とはウエスペルティリオ (*vesperilio*)、つまり、コウモリのことである。姉妹は変身ののちもなにかを話そうとしているとされるが、「かすかに歯並みから洩れる嘆き」と訳した原文は、より忠実には、風を切るような、あるいは、舌を鳴らすような、あるいは、金属の表面を擦って出るような音による「軽い愚痴」ということで、「軽い愚痴」とは、ローマの恋愛詩人が相手の女性からつれない仕打ちを受けて歌う自身の恋愛詩を表すのに用いた表現であった。彼女らは、コウモリとなっても、自分たちだけに聞こえる小さな声で、ピュラモスとティスベークリュティエーヤサルマキスなどのような恋物語をしているのかもしれない。また、オウイディウスによれば、アントーニーヌス・リーベラーリスに伝えられるところとは異なり、娘たちは三人ともコウモリに姿を変えたことになるが、両者の話形のあいだにはピーエリデスについても同様の相違が見られた。性格を同じくする姉妹であれば、同じ変身を遂げるほうが納得しやすいようにも思われる。ちなみに、ギリシア語でコウモリはニユケリス (*nyctalis*) といい、「夜」を表すニユクス (*nyx*) にちなんだ語彙となっている。これだと、変身の瞬間を真っ暗闇に

置かねばならず、黄昏なすがれの怪しい雰囲気とは違って、もっと不気味で恐ろしい場面が描かれていたかもしれない。

実際、ヒュギーヌスには次のような話がある。

ニユクティメネーはレスボス王エポペウスの娘で、非常に美しい乙女であったと言われる。彼女をエポペウスが父でありながら愛欲に燃えて押し拉ひいだ。彼女が恥ずかしさから森に身を隠そうとしたのをミネルウア女神が憐れんでフクロウに変身させた。フクロウは恥ずかしさから明るい光のもとへは姿を見せず、夜に現れる。
〔神話伝説集〕二〇四

ニユクティメネー (Nykthemene) の名前そのものがすでにギリシア語の「夜」(ニユクス)を含んでおり、フクロウを表すラテン語のノクトウア (noctua) もまた「夜」(ノクス)の鳥という意味であるから、夜の闇にふさわしい、実に心を暗澹とさせる物語である。

3 大ガラス、小ガラス

さて、お喋りには、「暗闇」あるいは「黒」というイメージが結びつくのか、ミミズク、フクロウ、コウモリといった夜行性の鳥(ないし、翼のある獣)のほかに、ガラスにまつわる物語もある。ガラスは実際にお喋りではないかと思われるかもしれないが、次に見るように、そのお喋りが仇となって、もとは白かった体が黒くなったと語られるのであるから、これはやはり、「お喋り」と「黒」にはどこかに接点があると考えなければならぬように思われる。ヒュギーヌスは次のような話を伝えている。

アポッローン神は、プレギユアースの娘コロニス^{コロニス}を身籠もらせたのち、大ガラスに彼女の番をさせ、彼女に乱暴する者がないように配慮した。しかし、エラトスの息子イスキュスが彼女と臥所を共にし、そのために彼はユッピテルの放った雷電によって殺された。アポッローンは身重のコロニスを矢で射抜いて殺したのち、胎内からアスケレーピオスを取り出して養育した。他方、見張りを言いつけた大ガラスについては、白かった体を黒に変えた。

〔神話伝説集〕二〇二

カラスを表すギリシア語にはコラクス (korax)、コローネー (korone) などがあり、ここでは前者を「大ガラス」、後者を「小ガラス」と訳したが、後者が前者の意味で用いられる場合もある。そこで、話に登場する娘のコロニス (Koronis) という名前は、形容詞としても「曲がった嘴の」を意味し、彼女の番をした大ガラスと密接に関連していることが分かる。ちなみに、彼女が産んだアスケレーピオスはアポッローンから医療を受け継ぎ、死んでのちは医療の神として崇められることになる。

さて、ヒュギーヌスの話形では「お喋り」が明瞭には現れていないが、オウイディウスはこのモチーフを物語の中心に置くことにより、このコロニスと大ガラスの話をかかなり複雑なものにしている〔変身物語〕二・五三四―六三三。それによると、アポッローンがコロニスの不義を知ったのは、大ガラスが気づいて注進したためとされている。そして、彼女に処罰を下したあとで、神はそれが残酷すぎたと後悔し、自身が医療の神であることからさまざま蘇生の手だてを尽くしたが空しく、深い悲嘆とともに彼女の遺体を埋葬した。それでも、胎内から遺児を取り出すと、半人半馬ケンタウロスの一人ケイローンに預けて養育させる一方、注進した大ガラスからは白い色を奪ったのだ、という。

ヒュギーヌスでは、大ガラスはコロニスの番をする任務を果たせなかったのであるから、罰を受け

るのもやむをえないかと考えられるが、オウイディウスでは、忠実に役目を果たしたのに咎めを受けており、いかにも理不尽と思われる。ただ、オウイディウスの語るところでは、大ガラスが注進に駆けつけようとしたとき、それを引き止めてお喋りな小ガラスが、忠義が仇になった例として自分の話を持ち出しながら、無益なことはやめるようにと警告したのに大ガラスはそれを顧みなかったのだという。

大ガラスに小ガラスは、自分がミネルウア（アテーネー）女神のお気に入りであったときに女神からエリクトニオスの見張りを言いつけられた次第を話した。エリクトニオスについて他の典拠から補うと、鍛冶の神ヘーパイストスがアテーネー女神と交わろうとして追いかけたが、そのあいだにヘーパイストスの精液が地面に落ち、そこから生まれたという誕生譚が伝わっている。その子をミネルウアは籠に入れ、アテーナイ王ケクロプスの三人の娘に預け、決して中を見てはならないと言いおいた。この言いつけを娘らを守るかどうかを見張るのが小ガラスの役目であったが、三人のうちの一人アグラウロスが籠を開けて、赤ん坊とそばに蛇がいるのを見てしまった。それを小ガラスは女神へ注進に及んだところ、褒美をもらえるところか、罰を受けたという。

あつたことを女神に報告すると、それでどんな褒美をもらえるかと思いきや、ミネルウアの庇護下から追い出しを宣告され、夜の鳥より下位に置かれたのです。私の受けた罰を鳥たちが教訓とすれば、お喋りで危険を招くことはいけません。

〔変身物語〕二・五六二—五六五

夜の鳥というのはフクロウのことで、それが前節の末尾に触れたニユクティメネーを指していることは、小ガラス自身の口から語られる。というのも、ここまでですでに「教訓」となるべき話はすんでいるにもかかわらず、根っからのお喋り好きな小ガラスの話はそれで終わらず、身の上話を長々と始める

からである。

小ガラスはかつて王家の娘であったという。ポーキスの地にあつて名高いコローネウス王を父とし、富裕な人々から求婚されたが、その美しさがかえつて仇となり、海岸を歩いているときに海神ネプトゥーヌスの目に止まつてしまう。彼女は、神の口説きの言葉を拒み、その手から逃れようと砂浜を走るのに疲れたとき、神々と人々に助けを求めた。乙女の声に、乙女である女神ミネルヴァだけが心を動かされ、救いをもたらした。

私は両腕を天に伸ばしていましたが、その両腕が軽やかな羽根に包まれて黒くなり始めました。両肩から衣をはね上げようとしたが、衣は羽毛になり、すでに皮膚の奥深くへ根を張っていました。両の掌^{てのひら}でむき出しの胸を叩こうと試みましたが、もはや私には掌もむき出しの胸もなかったのです。私は走っていましたが、先ほどまでのように砂地に足をとられることはなく、地面から体が浮きました。やがて高く空中へ飛び上がり、ミネルヴァ女神の申し分ない側仕えとなつたのです。

(同二一五八〇—一五八八)

しかし、と小ガラスはまだ話を続ける。

それが何の役に立つでしょう。忌まわしい罪により鳥となつたニユクティメネーが、私の後釜として榮譽を手にしたのですから。もしや、これはレスボス島でならどこの誰でも知っていることですが、お聞き及びではありませんか。父親の寢床を汚したニユクティメネーのことですよ。あれも鳥になりましたが、罪の意識から姿を見られることと光を避け、わが身の恥を暗闇に隠し、全天で

総すかんで食っています。

(同二・五八九―五九五)

そんな扱いを受けているフクロウがどうして小ガラスの後釜になれたのか、また、それより下位に置かれることになったという小ガラスがいまどんな境遇にあるのか不思議に思われるが、「お喋り」はつねに脱線してあらぬことも口走るものであるから、そこに筋を通そうとしても意味がないのかもしれない。この話を聞いた大ガラスもそう考えたのか、小ガラスの忠告を無視した。結果は、しかし、小ガラスと同じように罰を受けることになったのである。

〔注〕

- (1) 鳩はアプロディーテー女神の聖鳥。イーダリオンはキュプロス島の山で、女神の好む滞留地。
- (2) 前三九〇年、ガッリア軍がローマを占領したとき、最後の砦となったカピトリウムの丘に対して密かに崖をよじ登って夜討ちをかけたのに対し、ユノーの聖鳥である鷲だけがこれに気づいて、鳴き声と羽音でローマ兵に危機を知らせたという。
- (3) イーオーは、牛に姿を変えられた(第I部第2章第2節「アルゴスと孔雀」参照)あと、エジプトに渡ったとされ、イシス女神と同一視される。鷲鳥はイシスの犠牲獣。
- (4) クーマエの近く、冥界の入り口があるとされる湖の名。ここでは冥界と同義に用いる。
- (5) アポッロドーロス『ギリシア神話』三・一四・六、ヒュギーヌス『神話伝説集』一六六。